

絵画療法における複数の橋渡し機能

寺 沢 英理子

抄録：絵画表現は本来「多義的」なものである。その「多義性」は表現内容にとどまらず、絵画療法の橋渡し機能にも及ぶ。セラピーの基本は言語表現であるが、絵画表現が言語表現への橋渡し機能を持つことはこれまでも言われてきた。本論文では、一つの事例を提示し、絵画療法におけるさまざまな橋渡し機能について考察を加える。いろいろな橋渡しをしていく過程で、クライアントが「私」を確立していくことは興味深い現象である。

キーワード：橋、橋渡し機能、多義性、非言語的表現、言語表現

1. はじめに

自らセラピーを希望しセラピーが開始となっても、言葉を紡げないクライアントがいる。この場合、クライアント自身が自分の状況を何とかしたいと思っけていても、そのことを他者に伝えることができない。その時、クライアントの口から搾り出される言葉は、意外にも「普通の家族です」とか「問題はないと思うんですが、ただ気力がでないんです」というものである。このようなクライアントに出会うと、セラピストは長い付き合いが始まるかもしれないと覚悟することになる。

しかし、その前に、とにかくセラピーが続くように配慮しなければならない。問題を明確に言葉にできないということは、勇気を出してセラピーの場にやってきたクライアントがその場に止まらなくなる危険性を示唆してもいる。ここには、セラピーの場に繋がれないクライアント、同時にセラピストと繋がれないクライアントの姿がある。本当に存在感の薄い陽炎のような印象であり、セラピーに繋がらなくとも、セラピストの記憶からもほどなく消えていくようなクライアントたちがいる。

非言語的表現が言語的表現へと橋を架けること

は多くの臨床家が体験していることであり、筆者もこれまでも述べてきているが、本論文では単に言語化が促進されただけでなく、そこに象徴される「橋」が多義的であることに焦点をあてて論じたいと思う。以下に、多義的な意味を担った橋渡しがみられた症例を提示し、考察を加える。

2. 事例

【事例】20歳代前半 女性

【主訴】イライラする

【生活歴】

二人同胞の第2子として出生。小学校低学年のときに祖父が亡くなったこともあって、郊外から街中へと転居し転校を体験した。転校後、クライアントは不登校となり高校までほとんど登校しなかった。クライアントは大半の時間を家の中で過ごしていた。大検を経て大学に進学し、1年目は楽しく通っていた。しかし、大学2年目の5月ころからイライラがひどくなり、再び外出しない状態になっている。ほどなく、クライアントは自らカウンセリングを希望してクリニックを受診した。

【家族歴】

父親は50代後半で、早期退職をしたため家にい

ることが多い。かつて家族に暴力を振るった経緯がある。外面はいいが、家では自己中心的な人。

母親は50代後半の専業主婦。家で自分の趣味に没頭していることが好き。母親もほとんど外出しない生活を送っていた。父親の暴力に関しては、子供たちを守りきれなかったようだ。

姉は20代半ばで就職したばかりである。専門的な高等教育を受け、専門職として職を得た。家族と同居はしているが、ほとんど没交渉である。

【面接経過】

《アセスメント X年Y月》

クライアントは、細身のはかなげな印象の人である。2回のアセスメント面接では、筆者の問いかけにかろうじて答えるというものであったが、今セラピーに来ようと思った気持ちや問題についてはうまく表現できないようであった。

それでも、クライアントが長い期間の不登校という経歴を持っていること、家族関係に何らかの問題があるらしいということは伝わってきた。クライアントは、話さなければならないというストレスをも受けていたので、次回に絵画療法の体験を勧めた。同時に、筆者は、言語治療と絵画治療の2つを提供できることを説明した。3回目では、アセスメントも兼ねて、風景構成法を実施した【絵1】2本の木の根元に置かれた大きな石は、この姉妹の根を育たなくしているようでもあった。また、おばあさんが手にしている斧は、クライアントの主訴である「イライラ」と関連しているかもしれないと思われた。川の向こうには、栄養満点の牛が描かれているが、そこに繋がる橋はない。筆者は、何か大切なものが分断されて繋がらなくなっている印象を受けた。また、高い山が描かれ、クライアントが越えていかなければならない道のりが険しいことも示唆されているようだった。クライアントも絵画療法を希望したので、月2回のペースで絵画療法を中心にセラピーを勧めることにした。

《絵画療法を実施した時期 X年Y月～Y+3月》

第4回目、絵画療法の2回目を実施したところ、

この回は並列型誘発線法を選択した【絵2】続く第5回目では、並列型誘発線法を用いた再構成法を実施した【絵3】「朝」というタイトルがつけられ、姉もまた精神的に問題を抱えているらしいことが表現された。この回には、「セラピーの間隔をもう少しつめるといいのかしら」という発言もみられ、筆者とのラポールが形成されてきたことを伺わせた。それに続く2回の面接では、ワルテック誘発線法およびその再構成法を実施した。この2回では、クライアントの日常にはあまりみられないことが表現され、クライアント自身「私はこういうことがしたいのかしら？」と言語化した。クライアントは、少しずつ自分の内界を見つめ始めたようだった。

第8回目では、「ある家族が何かをしているところ」という家族画に取り組んだ【絵4】「ピクニック」というタイトルがつけられた。「やっぱり、自分の家族を描いてしまった」と言いながらも、クライアント自身は絵のなかに描かれていない。この回には、「母親は一人で家で編み物や刺繍をしているのが好きで、父親は何にでも文句をつける人」と両親のことを語った。さらに、家族四人でどこかに行ったことなどないと述懐した。

第9回目は、絵画療法にもだいぶ慣れてきたので、テーマ画を勧めると「読書の秋」というタイトルの絵を描いた【絵5】前回の絵に引き続き、屋外での様子が描かれた。この回には、小学校2年生まで祖父といっしょに住んでいた家のことを思い出して懐かしそうに語った。広い庭があったこと、そこには柿もなっていたこと、そして、クライアントはよく庭に出て遊んでいたと回想した。クライアントにとっては、家族が幸せだったころという感覚があるようであった。

第10回目は、お話の回となった。友人と二人で旅行に行ってきたことを報告した。クライアントは、クライアントに何でも決めさせておいて文句を言う友人に対してイライラしたということを語りながら、学校で感じたイライラとの関連性を考えていった。そこで、学校でのグループメンバーとの距離のとり方に苦慮していることが語られた。

また、父親と姉に対しての思いが再び取り上げられたが、以前よりたくさんの葛藤が示されていた。姉は、家族の関係からもさっと逃げてしまう。クライアントも父親のことは好きではないが、父親が母親と姉からあまりに無視されていると、つい可愛そうになってクライアントが父親に声をかけてしまうという関係性が語られた。昔はそういう姉のことを恨んでもいたが、今は姉もそうするしかなかったのだと思うようになったと、姉に対しての共感的な発言も見られた。筆者には、クライアントが家族間の調整役を担っていたことが推察された。

第11回目、相互分割を実施した【**絵6**】筆者と交互に色を塗っていく際に、大きな分割部分について、「塗るのが大変なところなので、私が犠牲になって……」というクライアントの発言がみられた。このことから、あらゆる関係性のなかで、埋めなければならない隙間をクライアントが埋めているということが語られた。その時に、相手がやってもらって当たり前と思っていると、クライアントは「むかつ」と感じてしまうということにも思い至った。

第12回目、「道」画法を実施した【**絵7**】「仙人への道」というタイトルがつけられた。一人、下界から離れたところに居る感覚がよく表現されている。同時に、「寂しいな」という気持ちも表現された。小学校低学年の頃に不登校になった際、父親から暴力を振るわれたことを語り、辛そうな表情になった。第13回ではスクイグルを実施し4枚の作品を描いた。筆者との共同作業もあり、他者との交流を楽しんでいる印象があった。

第14回目、2回目の風景構成法を実施した【**絵8**】「きままな生活」というタイトルが付けられた。筆者が「次はなにに」と描くアイテムを伝えるときに、クライアントの「ハーイ」という応答がみられたが、これは初めてのことであった。筆者には、クライアントの伸びやかさが前面に出てきているように感じられた。さらに、クライアントは面倒ながらも、草への彩色に複数色を用いた。彩色の途中で、「橋」が描き加えられた。そし

て、1年の最後の回ということもあって、「今年はお世話になりました。また、来年よろしくお願ひします」ときちんと挨拶をして帰った。

《言語表現が豊かになった時期

X + 1年Y - 8月 ~ X + 1年Y月》

年が明け、春からの復学をどうするかという現実的な問題とともに、かつての父親との暴力的な交流や、祖父と暮らしていた家のことをたくさん思い出した。祖父の家はクライアントが好きだった広い庭があった。なにより、祖父の存在が一家に安定感を与えていたことが伺われた。祖父が亡くなるとすぐにその家を人に貸し、こともあろうに庭を壊してしまうということが、ある朝突然に起こったという印象をクライアントは持っていた。突然、工事の人が来て庭を壊されたという体験は、クライアントにとってはかなり暴力的な体験となった。この計画は父親が一人で勝手に決めてしまったもので、家族は怒りと悲しみのなか、追い立てられるように引越しをしなければならなかった。

クライアントは母親も父親から自由を奪われていたと感じていたので、「自分が母親を守らなくちゃ」と感じていたと、不登校の理由についても語った。実際に、両親がもめて母親が家を出て行ってしまったこともあったため、クライアントは母親が予告なくいなくなってしまうのではないかと、置いていかれるのではないかとという不安を感じていたことが語られた。不登校は、母親を守るという意味とともに、自分が母親に置いていかれるのではないかとという心配も関係していたことが明らかになった。さらにクライアントは、小学校でのカウンセラーとの関わりもあったが、その先生も途中でいなくなるという事実があり、再びクライアントにとっては「置いていかれる体験」となってしまった。この不安は、当然筆者に対しても向けられていると考えられた。偶然、筆者が数ヶ月後に異動することが決まっていたので、置いていかれる不安というテーマが語られたこともあって、異動の件をこの日に伝えることにした。今後のセラピーを続けるために2つの障害があり、

そのことについて話し合わなければならなかった。続けるためには、筆者のオフィスに通ってもらわなければならないため、1つには距離の問題、2つ目として自費になるので料金の問題があった。クライアントにとっては、料金以上に距離の問題が大きく感じられているように見受けられた。2回の乗り換えと小1時間という距離は、この時のクライアントにとっては地の果てのように感じられていた。しかし、なんとか、今回の関係は頑張っ て繋げたいということで、二人の気持ちは一致していた。

第17回では、「何でも自分が悪いと思ってしまう」というテーマが語られた。筆者の異動も、クライアントが風邪をひくことも、運が悪いと感じてしまうと言う。筆者の異動後、筆者のオフィスに通いたいという意味を持ちながらも、実際に通えるかという不安も大きかった。「何でも自分が悪いと思ってしまう」という発言からは、本来なら、筆者に向けられる怒りが内向している様子が伺われた。筆者の異動の知らせに揺れ動くクライアントの姿は痛ましかったが、一つの転機になるかもしれないという予感も筆者にはあった。

また、誰かから何かをしてもらおうと、すぐにお返しをしたくなる。しないといられないということが語られた。友人との関係においても、今の自分はいろいろお返しをすることができないから、向こうから何かしてもらおうことが負担になり、ついには腹が立ってくると言う。そのことについて回想しながら、自分が何かしてあげた時、あまりにも当然という思いで受け止められたことが多かったせいかもしれないと洞察を進めた。筆者との関係性においても同様の感覚が持たれていたと考えられる。少し言語化できるようになるとそれは当たり前ということになって、筆者からもっと遠くで会いましょうと、つまりもっと頑張るよう促されてしまったという体験になったと考えられる。

第19回ころから、過食が止まらない状態になった。このことから、食事の話へと連想が進んだ。昔から、家族がいっしょにご飯を食べることはなく、

ほとんどの場合、一人ずつ時間をずらして食べるというクライアントの家の食事のスタイルが話された。最近では、父親がいつも居間にいるので、クライアントは台所で立って食べたり、嫌々ながらも自分の机で食べていたということであった。自分の机は綺麗ではないので、そこで食事することは本当は好ましくないとクライアント自身感じていた。そのような食事のとり方から、心身ともに満足できない状況になっていたのではないかと洞察にいたった。このあと、自分の部屋を少し心地よくしてみようという変化が現れた。一つ綺麗にしてみると、いかにいろいろなものが古かったり酷い状態かということに気づくようになったと語られた。

第20回では、最近はいろいろなことを家族に秘密にするようにしているということが話された。相手が受け止めてくれないとき、説明することが面倒になる。さらに、結果を非難されたりすると、もう言いたくなくなると、クライアントが家族に隠すようになった経緯を説明した。一方、友人に相談を持ちかけられたときには、自分で決めるのが一番いいと思うので、ほっておくと言う。このことから、クライアント自身、「自分が家族からそっとしておいてほしいと思うので、友人にもそのように対応しようとして、ほっておくのだ」という繋がりがみえてきた。そこで、そっとしておくのとほっておくのはやはり違うかもしれないということに気づき始めた。

第22回では、失敗を許さない父親、さらに陰で母親を責める父親の話から、クライアントはたとえ失敗しても許してもらえるように痩せて弱っちい自分を保ってきたのだという話をした。小さい頃に、最後には「出て行け！」と言われたが、それはすごい怖い体験となっていた。でも、今後は、弱っちい自分を保つことではなく、父親と戦う力を付けることが課題なのかもしれないと、クライアントは気づいた。さらに、自分が力をつけるということを諦めていないから、ここに通ってきているんだと思うと語った。クライアントのなかで、セラピーに通っている意味が一つ明確に語られた

瞬間であった。これまで、いかに自分の成長を抑えつけてきたかということに思いいたったためか、クライアントは初めて号泣した。

また、姉について、クライアントを犠牲にしても姉が逃げたことは偉いと思うと語った。なぜなら、クライアントは他人を犠牲にして逃げることはできないからと説明した。筆者は、クライアントが他人を犠牲にしないで自分が力をつけられる時を待ったのだと受け止めた。

第26回、クライアントは初めて筆者のオフィスにやってきた。「昨日、一昨日のほうが精神的に大変だった。でも、来てしまえばたいしたことない」と、安堵の表情を浮かべた。

「先生と話すと、私を不自由にして、私のやりたいことを邪魔するものと戦いたいと思うのに、家に帰るとやっぱり言えない」と辛そうに話す。諦めそうになる自分と、やっぱりこのままでは嫌だと思ふ気持ちとがあると語った。

第30回では、父親も母親も見返りを要求してくるということが話された。クライアントにとっては、不登校までして母親の面倒をみてきたという思いが明確になってきていたので、「まだ足りないのかな」と驚いていた。「最近家族のことを心配するのはなく、自分のことを大事にしようと思えるようになってきている」と語られた。

第33回、「祖父の家から引越したあと家族がおかしくなったのかと思っていたが違うかもしれない、その前からおかしい家族だったが、祖父がいたのでおかしさがみえなかったのだと思う」と語った。改めて、祖父の存在の大きさを噛み締めているようだった。さらに、母親のことをとてもか弱いと思っていたので、クライアントは必死に守っているつもりだったが、最近、母親も実はタフなのだということに気づいたと言う。「これまで、父や姉だけが勝手に振舞っていると思っていたが、よく考えたら母親もそうかもしれない。あの家のなかでは、もしかすると自分が変なのかもしれない」と語った。クライアントは、他の家族メンバーに気を使いすぎていたことに思い至り、これからは家族から離れても自分が生きていける

力をつけたいと、いつの日か家を出ることを考え始めたようであった。

今回は、ここまでの報告としたい。

3. 考 察

絵画に表現される内容は多くの場合、多義的である。また、言葉も多義性を持っている。そして、絵画表現と言語表現との間に架かる「橋」からも複数の意味が読み取れる。

症例についての考察を進める。クライアントは「イライラする」という主訴を持ち、自らの意思で受診しカウンセリングを希望した。しかし、セラピーを開始すると、アセスメント面接の段階で言語化に苦慮する場面がしばしばみられた。そのような経緯から、アセスメントの最後に絵画療法を体験してもらい、しばらく絵画療法を中心にセラピーを進めることになった。この段階で、クライアントはセラピーおよび筆者と繋がることができた。

さて、クライアントは3ヶ月ほど絵画療法を続けたあと、セラピーの当初には言葉にならなかったことを言語化できるようになっていった。非言語的表現が言語表現へと橋渡しをしたことになる。さらに、無意識の世界にまで沈めてしまった記憶や感情が現時点での意識と繋がっていく。ここには、意識できない世界と意識の世界に「橋」が架かるという意味と、沈めた過去と現在との間に「橋」が架かるという2つの橋渡しが見られる。その結果、祖父や祖父の家を巡ることをたくさん思い出して語るようになった。同時に、母親に置いていかれるのではないかと不安に感じていた気持ちも蘇ってきたのである。

また、2回目の風景構成法において、1回目の風景構成法には描かれなかった橋が描かれた。このように実際に絵画表現のなかでも川に橋が架かり、「橋」が具象化された。

こうして多義的な「橋」が架かった時、涙が溢れ、それはあたかも「橋」の下を流れる川のようにであった。ついには、現実の橋をいくつも渡って、筆者に会うために遠い場所まで通うことができる

ようになったのである。

以上、「橋」の「繋げる機能」について考察した。しかし、北山修の言うように、「橋」は「繋げる」とともに両端を「分ける」ものでもある。この症例に関しては、母親とクライアントとの関係がもう一つの「分ける」橋渡し機能によって分離されたと捉えることができる。クライアントは母親が自分と同じようにか弱いと思っており、同一化がおこっていたと考えられる。したがって、母親を守るとは自分自身を守ることと同義であった。そのため、クライアントは母親を置いて飛び立つことなどできない状態になっていた。しかし、クライアントは、母親は自分と違って逞しい一面があるのだということに気づいたため、自分らしく生きようと思うことができるようになったのである。クライアントと母親との間に、「橋」が架かる「隙間」ができたということであり、クライアントと母親は今更ながらそれぞれの「人となり」として認識されたと言える。また、11回目の面接で語られた「隙間を埋める……」というクライアントの働きは、橋を架けさせないものでもあった。間が埋められ均一化されたところに「橋」は架からないのである。この観点からも、クライアントが他者との均一化のなかに存在していた状態から他者と異なった「私」としての存在へと変化したと理

解される。クライアントは、さまざまなレベルの橋渡しを体験する過程で、大きく成長していった。

4. おわりに

橋渡しについて考えてくるなかで、「橋」を架けるという働きのなかに「私」になるという成長を促す作用があることが推察された。この点に関しては、自我機能との関連も含めてさらなる検討を加える必要があると思われるので、今後の課題としたい。

参考文献

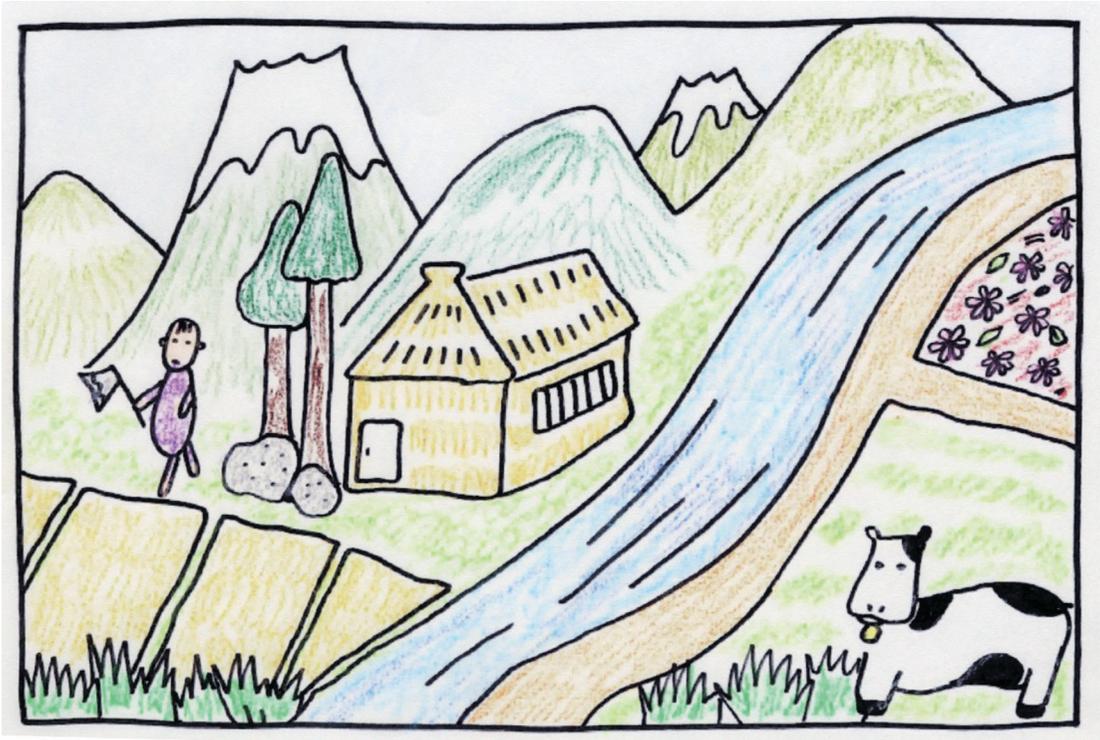
- 後藤多樹子・中井久夫(1983):“誘発線”(仮称)による描画法 芸術療法, 14巻, 51・56。
北山修(1993):言葉の橋渡し機能 - およびその壁 - 北山修著作集第2巻 岩崎学術出版社 pp14・34。
寺沢英理子・伊集院清一(1995):ワルテッグと誘発線法:芸術療法における新しい試み 芸術療法学会誌, 2(1), 75・87。
寺沢英理子・伊集院清一(1996):ワルテッグテストと「並列型誘発線法」を用いた再構成法による治療の試み 芸術療法学会誌, 2(1), 54・64。

Multiple Bridging Functions Seen in Art Therapy

Terasawa, Eriko

Expressions using paintings and drawings are inherently polysemic or ambiguous. This polysemy applies not only to the content expressed but also to the art therapy's "bridging function." Linguistic expressions are fundamental to therapy, while artistic expressions are believed to act as a bridge to linguistic functions. This paper presents the case of a client, and discusses a variety of bridging functions seen in art therapy. In the course of bridging various factors, such as between the past and the present, between nonverbal expressions and verbal expressions, and between the unconscious world and the conscious world, the client worked to establish the self, a phenomenon that was both intriguing and insightful.

Key Words : bridge, bridging function, polysemy, nonverbal expressions, linguistic expressions



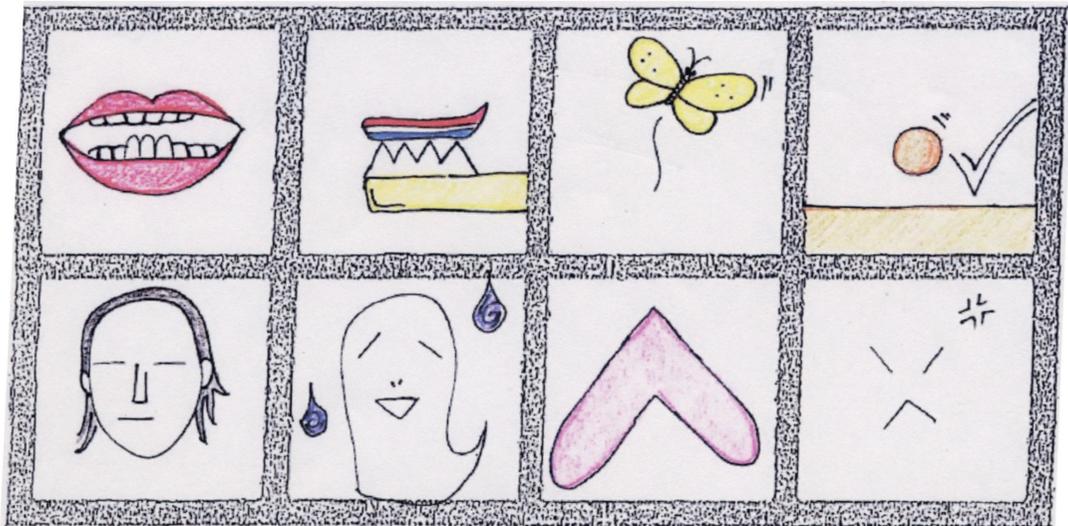
絵 1

口

ハブラシ

チョウチョ

ボール



姉

オバケ

逆ハート

怒

絵 2



絵 3



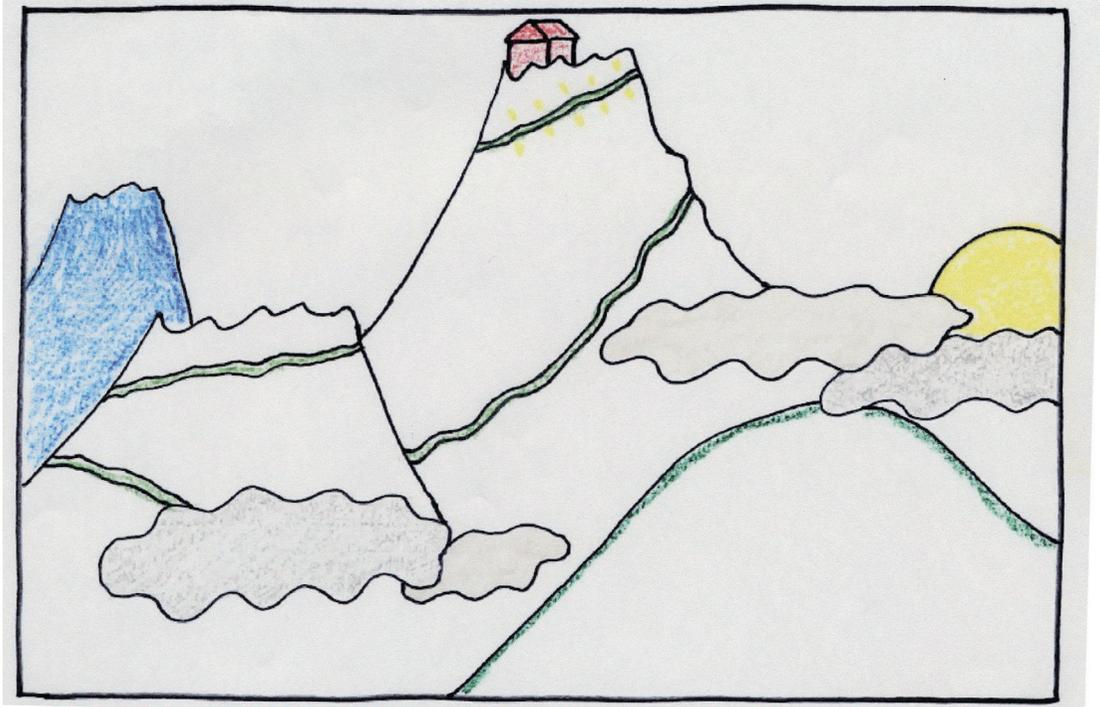
絵 4



絵 5



絵 6



絵 7



絵 8